

28-3 経営協議会議事概要

日時 平成28年11月18日(金) 13:30~15:35

委員 駒田学長(議長)

青木, 志田, 銭谷, 高木, 西岡, 向井, 村本, 渡辺

山本, 鶴岡, 尾西, 尾藤, 伊藤 各委員

列席者 後藤(太), 吉岡, 西村, 安間, 堀, 後藤(基), 新保 各副学長

服部監事, 山中監事

◎議事概要の確認

28-2の議事概要(案)について, 了承された。

I 審議事項

なし

II 報告事項

1. 平成27年度に係る業務の実績に関する評価の結果等について

尾西理事から, 「資料1-1~1-3, 参考資料」に基づき, 本学の評価結果, 国立大学法人等の平成27年度評価結果及び, 本学と国立大学法人との評定水準の比較についての報告があった。

また, 「注目」される主な取組として, 教員派遣と拠点設置による地方創生の推進(地域戦略センターの教員の南伊勢町への派遣および, 学内への南伊勢町の分室「南伊勢町創生戦略室」を設置する等の取組)が取り上げられていることの報告があったほか, 他大学(5大学)における「特筆」される取組の例についての紹介がなされた。

なお, 今後のスケジュールとして規程等を整備の上, 本協議会への書面協議を実施する旨の付言があった。

2. 給与改定の方針について

尾藤理事から, 「資料2」に基づき, 本学における給与改定の方針についての報告があった。

なお, 人事院規則が出されていないことより, 教育職の本給表の取扱いについて不確定な部分もある旨の付言があった。

3. その他

(1) 次回開催について

平成29年1月20日（金）15：00から開催することを確認した。

(2) 三重大学地域拠点サテライトについて（冊子）

鶴岡理事から、冊子（パンフレット）の紹介と併せ、三重大学地域拠点サテライトの概要についての説明があった。

Ⅲ 意見交換

1. 地域人材育成教育について

山本理事から、「資料3-1～3-2，参考資料1～3，冊子」に基づき、提案についての概要説明があった後、種々意見交換を行った。

また、学長より、本日欠席委員からの意見についての報告があった。

〈主な意見〉（○委員側●大学側）

- 三重大学の学生は他大学と比べてもスキルが高く、目的意識もしっかりもっていると思うが、残念ながら人文学部・教育学部・医学部・工学部・生物資源学部という中で経済学部がない点が少し違った形ではあるが、選考した学生は非常に質が高い。
- 将来の夢や、人生をどう歩んでいくかという夢が今の学生は小さくなく、野心的というか「あいつは大法螺ふきだ」というくらいの人生観をもっている学生が少なくなったと感じている。
- 人材こそ企業の生命線ではないかと思っているので三重大学の役割は非常に大きく、期待している。
- 資料中の「企業（機関・団体，社会）が求める人材像と必要な資質・能力」の中に「常に社会情勢に感心を持ち，なぜそうなるかを考える習慣」とあるが，こういうことを実際に大学で教えているようなカリキュラムがあるのか。というのは，こういったことは教育・研究とは関係のない部分であって人間教育的な色が強いと思われ，当社でも経済学部，人文学部等の学生でなくとも工学部，生物資源学部の学生であっても十分仕事はやっていける中で，大学の教育内容と企業の求める人材との間には，業種にもよるとは思うが知識の部分というのは関連性がないように感じていて，それよりも人間性であったり，課題解決に向けた取り組みの姿勢といったような人間教育的な側面を企業と

しては求めるケースが強いこともあることもある。

- 新しく共通教育から教養教育に組織を変えた時に大きく授業構成の枠組みを変えて地域理解というグループの授業の中に現代社会理解という授業科目を位置づけるような枠組みを作り、その中ではこういった事柄に触れるような授業は位置付いていると思っている。

また、全ての授業がそうではないが、アクティブラーニングについて外部からも期待されており、その実施状況について「全体が」、或いは「部分的」という違いはあるがアクティブラーニングで学生が主体となりテーマについて「意見交換する」、「プレゼンする」という授業形態が多くなっている。質の問題はあるかと思うが、質問のあったようなことに触れていくような授業は少しずつ増えていると思う。

- 大学教育とその学生が就職してからの仕事の中身について本来連続性があるケースが一番理想的であると思っている。

一般的に金融業を含めた、サービス業、第3次産業の場合、ここの学部を出ていないと出来ないというようなことはないということがあり、理工系の学部に比べるとあまり関連性がなく途切れてしまうというところでもあることより、学校教育の中で、人間性をもう少し豊かにするようなアルバイトであったり、「大学の外での人間形成」を含めたあたりのことを大学としてどう取り組むのか、「企業の求める人材像と必要な能力とのマッチングがもう少し具体的にできる部分があるのではないか」という気がする。

難しい話とは思うが、どうしても企業の場合は一人の人が目立ってやっていくということよりも組織論的に調整などを含めた組織で運営していくというケースが非常に強いので、そういった側面を学校教育の中で教えていただくような教育の幅を広げていただき、社会へ出てからも役に立つ人材養成ができると思う。

- アンケートはどのくらいの数を拾っていて、回収率がどのくらいであるのかアンケートの信憑性を知りたい。

- 修学達成度については、1年生の春は授業の中で授業を通して回収するため1,300程度、1年生の秋からはウェブで履修申告をするシステムとなるため、シラバスを見たり、履修申告をする手続の前にアンケートに回答することとしているため、大方回収できているはずであるため、数としては出していないところではあるが、7割から8割程度の回収率であると思われる。

卒業生、事業所についての回収率は3割から4割程度であり、信頼性、アンケートの意味という点では若干落ちると思われる。

○ 今後はアンケート等の資料にはそういった数、回収率等を記載するとよいと思う。

○ COC+への参加企業がなかなか増えないという状況は、同じことがインターンシップにも言えることであると考えられ、やはり400人以上の学生を受け入れるとなると、かなり多様な(数もそうであるが)企業が必要であろうと思うので、こういったところへの説明をスピード感持って進めていかないと目指している姿にならないだろうと思う。

また、その中で決まった企業だけではなく、色々な企業との意見交換をする場が必要であると思う。

○ 外国語によるコミュニケーションがあまりできていないのではないかと、それと同様に世界の中の日本であるとか、世界の中での自分の位置付けみたいなのところもあわせて、あまり修業が行き届いていないというアンケート結果だとみえるが、これは非常に大事なことだと思うので、どういうふうに今後、グローバルな社会、世界に対しての教育をしていくかの方向性を教えていただきたい。

● 地域人材教育開発機構の中にグローバル人材育成教育開発部門を位置づけており、ここが国際交流センターと密に連携し、各学部の専門の授業を英語で行うといったところを少しずつでも増やしていき、そのために人材を採用し、各学部のカリキュラムや方法論の開発支援に協力していくということを平成29年度から本格的に進めていくこととしている。

そして国際交流センターが担う海外留学への支援、海外からの受け入れ支援を両輪として、キャンパスの国際化を推進していくこともひとつの課題として取り組んでいく。

● グローバル教育において、当面5年間で実施しようとしていることについては、短期間でもいいので海外へ出て海外で経験する学生数を全体の20%まで引き上げようとする試みをしており、これに付随するものとして英語で教育ができる教員数を各部局30%程度まで引き上げる構想もある。

また、海外から受け入れる留学生の数を現在の4%前後から7%弱くらいまで増やし、数にして現在300名程度の数を100名程度増やし、学内で日本人学生と海外留学生のエクステンジができるよう

な環境を整備したいと考えている。

グローバル教育をやるにあたっては語学力の強化が必須で、教養教育機構が発足し、そこで能力別の教育であるとか、高い力を持っている学生には、海外の語学研修の機会を与える等の取り組みを行っており、各部局ともインターンシップに力を入れようということで今も取り組んでいるところであるが、地域のインターンシップに加えて海外のインターンシップも活用していきたいと全学的に考えている。

- 工学部ではすでに国際インターンシップを取り入れていて、去年はベトナムとタイへ行っており、学生の評判も良く、今年はフィリピンへも行く計画があり、工学部の学生が中心であるが地域の企業の協力で実施している。
- 戦前までは自分が「ある学問をしたい」者や、「ある人生目的をきちんと持って」ほんのわずかな者だけが大学へ行った訳で、そういう場合は、「あの教授がいるから」、「あの学問をしたいから」といったはっきりとした目的意識と自分の人生目的をもって大学へ入っていたが、戦後の今では、半分以上が大学へ行くようになった時代であり、必ずしもそういう者ばかりではなくなっている。その中で、「いかに有意義に人生を送りつつ社会のために尽くすか」ということが一つの大きな目的であると思う。
- 医学部、理工系の学部等へ入学する学生は目的意識を持ってきていると思うが、人文系とか教育学部へ入学する学生が就職後、3回も4回も転職しないように、また、今は4割程度が正社員ではない社会だと聞かすが、やはり正社員として就職し、勤め上げることのできる人生を送れるようにするための人生の第一歩が大学であると考えるので、教員が学生を導いてやることが重要であると思う。
- 地域人材教育開発機構のこの構想というのは非常にいいことだと思うので、この取り組みを是非とも実のあるものとしていただきたい。
- 三重大学は「全国に沢山ある国立大学の一つである」という位置づけではなく、「全国に一つしかない国立大学だ」というようになるため売りを何にするのか、特色をどこに持つのかというイメージ戦略、広報戦略がもっとあっていいのではないかと思う。そうすることで、三重大学はこういうイメージであるというものをしっかり打ち出すことができれば、もっと志望者が増えると思う。
- 面倒見がいい大学、就職に強い大学というイメージがあるといいと思

うので、入学時から学生と対話する大学に是非なっただき、入学したら卒業まできちんと学生と交流しながら面倒を見る大学となっただきたい。

- 三重大学が教育するにあたり、4つの力を明確に打ち出していることは非常にいいことだと思う。
- 今の中高生は自己肯定力の低い子が多いので、在学中の4年間で自分に自信を持てる学生を育成していただき、三重県で活躍できる人材を輩出していただきたい。
- 全学的な教育により、三重県、三重大学について学ぶ時間を作るべきではないかと思う、「三重県、紀伊半島、東海地区とはどういう地域なのか、どういう歴史なのか」、「三重大学にはどんな歴史があり、どういう学部がどういうふう to 発展してきたのか」等を入学時の半年間くらいで何回かに分けて全学的に三重を学ぶことができれば、学生が三重大学に誇りをもち、三重県という地域にも誇りを持てるのではないかと思う。
- 全員に英語を話せるようにするという心を心がけて、外国へ学生を一定期間、出してやり（短期でも長期でもいいと思う。）、外国の方との交流を持たせることが必要だと思う。

また、企業のアンケートにもあるように、外国語のコミュニケーション能力、文章作成能力が低いといった国語力と外国語力が低いという結果である。

しかし、文章作成能力が低いということは、文章作成だけができないということではなく、日本語を話す、聞くということが実はできていない結果で、文章が作成できないということであると考えられるので、日本語＋英語（外国語）というこの言語能力をしっかりと身につけさせる大学であるとするのが、三重大学のひとつの売りになるのではないのかと思うので、是非お願いしたい。

- 三重県を学ぶということはコンソーシアムが立ち上がってそこでの課題であったが、来年前期に三重の文化と歴史という講義を後期はその延長線上に三重の産業ということで授業を立てることとなった。
今後、受講生を集め本格的にスタートさせることとしている。
- アンケートの結果を見て、1年生から4年生まで実施した場合、1年生が高く、2年生から下がり始め3年生の後半からまた上がり、就職になると上がるということは、どこの大学でもこういう経過となるも

ので、2年次に落ち込むというのは入学した学生の自然なカーブであろうと見る。これを同じ関心度に維持しようとする2年次、1年次になにか刺激的（ショック療法的な）なことを実施する等しないと1年次はやる気満々でくるのだから高いのは当たり前であり、そこを落とさないようにするためには、2年次の授業の工夫が必要なのであろうと思う。

○国際化についてどこの学部から実施するのか等の具体的な考えはあるのか。

●海外に学生を出すということに関して理想的には1学時歴以上の留学をして、単位認定も留学先の大学で受けるということが望ましいとは思いますが、経済的な問題であるとか卒業が遅れる、特に資格を取る学部では遅れてしまうという課題があるので、本学としては一番短くて1週間、できれば2ヶ月から3ヶ月程度の短期のインターンシップを各部署でプログラムを作って展開しようということを考えている。

工学部ではアジア・ヨーロッパを中心に実施しており、医学部ではすでに1学年の半数以上が海外へ出るようなインターンシップを実施している。

人文学部は学部の特徴もあり、長期間出られる可能性もあることより留学を中心に増やそうと考えている。生物資源学部では色々なプログラムが南太平洋やASEAN諸国で展開しているので、そういうところへ研究と同時に外向いて行くということがあると考えられる。

教育学部は教職大学院のような形で国内の教員養成の方に重心が移りつつあるので、海外から留学生を受けるとか、海外へ学生を送るといった機能を今後どうやって強化していくかということが重要であると考えている。

○すばらしい試みであると思う。学部それぞれ特徴があるので、学部の違いがあってもいいと思うので、例えば人文学部の文化学科の学生は全員留学をさせるといったことをし、この学部へ行けば全員英語が話せるようになるといった特徴を出すことで、受験生は「だからこの学部を目指そう。」とか「英語を話せるようになるためには、三重大大学の人文学部文化学科に行けば絶対に英語が話せるようになって卒業ができるんだ。」ということになっていくのではないかと。特徴のある学部を作っていくというのも一つの方法であると思う。

○医学部に関して今一番大事なことは、地域医療をしっかりと学生に教育

することであり、これは世の中のコンセンサスではないかと思う。

ひとつには卒業後の2年間の臨床研修制度、一部走り出してはいるが新しく構築しようとする段階である臨床研修制度後の専門医制度、臨床に進む医師の卒業生が100人いれば95人から97人位は専門医制度に行くのではないかという中で、卒後2年間の臨床研修の、その後の専門医資格を取得するための専攻医の就職先（勉強先）が都会地の症例の多いところでないとい早く取得できないこととなり、指導医がいないところではなかなか資格が取得できない、これは専門医制度がどのように設計されようが解決されない事実であると考えている。

そういうことを考えると医師の卒業生の数は昔に比べ倍増しているが、臨床の医師として34、35歳まで地方に居ては専門医にはなれない、専門医資格の取得が遅くなるというようなことになり、地方（田舎）には医師がいない状況であり、しかも診療科の偏在がある中で地方に起きていることは何かというと高齢化と人口減である。

三重県でも東紀州、伊賀ではどんどん人口が減っており、深刻な問題であり、今後10年、20年と進行していくと、医師がいなくなる事態も考えられる。

- 医学部の教育の中で「人のため」、「世のため」といったことをしっかりと植え付けていく教育することが、基本的には一番大事であり、専門医だけが臨床医師ではないということの価値のようなものが大事である。
- 問題となっていることについては十分認識しているので、医学部の方でもしっかり検討するようにしたい。
- 大学というのはもうエリート教育ではなくなってきており、半分以上の学生が入ってきており、ユニバーサル化の時代となり昔のエリート教育の大学教育とは全く異なってきている。
- 学生に外国へ行くような指導を行っても、今の問題は外国へ行くどころではなく親（保護者）が資金を出すことが出来ず、奨学金を先取りしてしまい、卒業と同時に借金を抱える学生が大勢いる。
- 企業の求める人材というのは大学教育ではほとんどができる問題ではなく、企業が大学に期待する役割という中に、卒業生の資質能力の保証みたいなものがあって、ある程度の学力は持つこと、我々としても企業側と同じで、例えば「国家試験に合格すること」という最低の学力は付けておくこと、それが最小必要要件であり、大学の役割ではな

いかと考える。それ以上のことをやろうとしても非常に難しいと思う。人材育成というのは、企業側の役割も大きいと思う、性格とか資質についてとなると小学校から教育してもらわないと大学の4年間でなんとか教育し、立派な人に育てろと言われてもできない。

○現在、三重県を動かしている人を見ても三重県の純粹の人ではなく、他県の大学を出ているか、企業に勤め、名古屋、東京を経験した人ばかりである。そういった現状を考えると三重県を学べというのではなく、それよりも井の中の蛙ではなく、「1回は大海へ出なさい」と思うが、学生（保護者）には資金がないので行けない現状である。そこで、企業の役割として、東京、大阪、海外へと外へ出してやる、そうやって人間を育ててやると三重県を見る目も変わってくるはずであり、外へ飛び出すことにより、三重県が見えてきて、三重県を勉強するはずであると思う。

○大学の役割としては、とにかく在学中にスペシャリストの一番初めのところでいいので、その後は自分の努力、勤めた会社等で階段を登って行ってほしいと思っている。大学で「あれもやろう」、「これもやろう」、「グローバル」だと言っても無理ではないかと思う。

○会社でも最近、レベルが低く「常識の範囲であろう」ということが分からない一般教養に欠ける人が、大学を卒業していることが多いと感じている。ある小学校の校長先生の講演で聞いたところによると、ある統計で、東京大学へ進学した学生の、小学生時に読む本（漫画も含まれるかもしれないが）の数が、月に7.4冊、年間88.8冊、6年間にすると532.8冊であり、一般の小学生の平均が、月に5.6冊、年間67.2冊、6年間で403.2冊という。一般の小学生も結構、読んでいると感じるが、東京大学へ進学した学生と、一般の人（大学へ進学していない人も含め）との読んだ本の数の差は、約130冊となり、この差が大変なことであるという話であった。どんな本であっても、本の活字に触れるということが非常に思考力に影響があり、活字に触れることの少ない者と比べるとそこでその差が生まれるもので、文章力も高まる。

そこで、三重大学の学生はどれほど本を読んでいるのか、図書館を覗いてみるも閑散としている。三重大学の図書館の蔵書数はすばらしいと思うので、これをもっと活用していただきたい。本を読むこと、活字に触れる（新聞も含め）ことが一番大事であると考えている。

そういうことを踏まえて、一般教養を高めるためにも、三重大学で

も本を読ませることを是非、お願いしたい。

- 子供が減って潰れている高校もたくさんあり、中高一貫校とか小学校まであるところでも公立私立問わず同じように潰れている。生き延びている学校は何かと考える（大学を考える上でも参考になると思う。）と、非常に抽象的ではあるが、それぞれの学校として育てたい人間像を一生懸命考え、それを育てるための教育の方針というのを明確にし、特色を出している。

三重大学も大学の中で位置づけをどうするかという問題はあるが、三重大学にしかないという個性を持った方が良いと考える。

- 最後に学長から、今後も「インターンシップがどうあるべきか」、「高大接続の大学入試（新テスト）がどうあるべきか」、「外部資金の獲得について」、「サテライトの機能について」、「大学院の価値とはなにか」、「女性教職員の積極的な登用について」、「国際交流の推進方策について」、「ブランド・広報について」等の様々な課題に委員の方々との意見交換を行っていきたい旨の依頼があった。

以上